

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

あいさつ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009595

あいさつ

国立民族学博物館（みんぱく）は、文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創設され、1977年に大阪・千里の70年万博跡地に開館しました。2017年に開館40周年を迎えております。

みんぱくには現在専任教員が52名おります。それぞれが世界各地でフィールドワークに従事しており、人類学関係の単体の教育研究機関としては、世界全域をカバーする研究者の陣容と研究組織をもつという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

一方で、みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料、モノの資料は、現在、34万4千点。これは、20世紀後半以降に築かれた民族誌資料のコレクションとしては世界最大のものです。また、博物館施設の規模の上で、みんぱくは、世界最大の民族学博物館となっています。

2018年6月に発生した、大阪北部を震源とする地震のため、展示場の設備の損傷をはじめ、研究室、図書室における蔵書の落下など、みんぱくでも被害が発生し、3か月間の臨時休館を余儀なくされました。また、その後も、台風21号による被害が建屋の各所で発生するなど、2018年は、災害に見舞われた1年であったかと思います。

館員の文字通り一丸となった努力によって、地震から復旧の作業は順調に進み、8月23日(木)に本館展示場の一部の公開を再開し、9月13日(木)本館展示を全面的に再開することができました。単に復旧、つまり旧に復するというだけでなく、被害を受けた設備の素材や設置の工法を見直し、みんぱくは以前より災害に強い体に生まれ変わってきたといえると思います。この間の、館外の皆様からの励ましの言葉や温かいご支援に、心からお礼を申し上げます。

施設への被害はありましたが、大学共同利用機関としての機能に大きな支障はなく、ジェイムズ・クリフォード氏を招いて国際シンポジウム「ミュージアムの未来——人類学的パースペクティブ」を開催するなど、研究活動は従前にもまして活発に展開することができました。

みんぱくでは、現在、館を挙げて、特別研究「現代文明と人類の未来」という国際共同研究を推進しています。このプロジェクトは、人類の抱える課題を分野を超えて多角的に検証し、未来への指針を探ろうというもので、年次進行で計8年をかけて実施しております。

みんぱくでは、また、目下、「フォーラム型情報ミュージアム」というプロジェクトを推進しています。これは、みんぱくの所蔵する標本資料や映像音響資料について、資料を現地に持参したり、現地からみんぱくに来ていただいたりして、関連情報を現地の人びととともに充実させて共有し、そのデータベースを国際共同研究に生かすとともに、人びとの記憶の集合体として、将来に継承していくというものです。

展示の分野では、情報統合型メディア展示の構築を進め、展示場とサイバー空間を結ぶ新たな展示ガイド・システムをパナソニックシステムソリューションズジャパンと共同開発してまいりました。2019年度に、本格導入の運びとなっています。また、2018年からは、こうして開発した、情報機器を用いた展示手法「メディア展示」を大学博物館等で活用していただけるように、支援を希望する展示企画の公募を大学等を対象に開始したところ です。

『研究年報』は、みんぱくの教員が実践する研究調査から、国際研究集会・学術交流、大学院教育、社会貢献にいたる多方面の活動とその成果についてみなさまに知っていただくために編集されました。大学共同利用機関としてのみんぱくの一年間の活動を集約してお伝えするものです。

この『研究年報』は、従前、冊子体で刊行し、みんぱくりポジトリから閲覧できるかたちで提供をして参りましたが、情報環境の変化に合わせ、より多くの皆さまのお手元に直接情報をお届けできるよう、昨年度の『研究年報2017』から全面的なオンライン化を図っております。

みんぱくのウェブサイトには、本誌の情報にくわえ、研究活動、研究集会や展示を含め、種々の館内外のイベントの最新情報を随時掲載し、『研究年報』の内容を補完しています。

本誌を通じ、みんぱくの活動をご理解いただき、今後とも、本館に対して、みなさまからのご指導とご支援をいただけますことを念願しております。

2019年3月
国立民族学博物館長
吉田憲司

